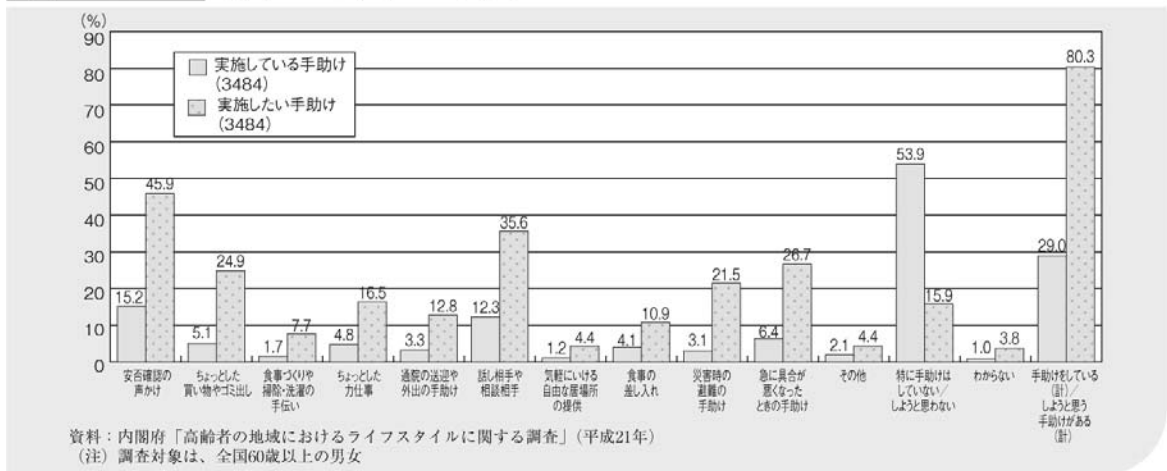


図1-3-14 困っている世帯への手助け



ここからは対策というか、今後こういうふうな方向に社会が行けばいいなあという取組の基本的方向なのでございます。まずご高齢の方に、困っている世帯に手助けしたいですかと聞くと、手助けしたいと思っている方が8割です。ただ、実際に手助けしている方というのは3割で、5割の方がしたいけど、していないという状況です。手助けしたいけど、していない方を実際の活動に引き出すために、引き出す役割を担う地域のまとめ役を発掘していくことが大事だろうということで、コラムでさわやか福祉財団さんのインストラクターの養成事業というものをご紹介します。またコラムのところで、あとでお読みいただきたいのですが、例えば元気な高齢者の方が、援助の必要な高齢者の方に生活支援を行ったときに、地域で使える通貨を出します。地域の商品券として発行するという取り組みをしている地域通貨の取り組みをコラムで紹介をさせていただいております。

それから2つ目で、人とのつながりを持てる機会づくりということで、1つ目の丸は元気な高齢者が、支えのいる高齢者の方を助けるということですが、下の、その2つ目の丸は、これはやっぱり居場所づくり、支え合いをする端緒となるようなことで、接点を持つような機会をつくり出すということで、コラムで居場所づくりをやっていらっしゃるNPO法人の方のお取り組みとか、見守り活動をやっていらっしゃる東京都の日野市さんをご紹介します。

これは今年の6月18日に、聞いたことあるかと思いますが、新成長戦略というのが出されてございまして、日本がどうやってこれから成長していくかということなんですけれども、その成長戦略の中に新たな公共、新しい公共というふうな概念が出されてございまして、これは従来の行政機関だけではなくて、地域の住民の方が教育とか子育てとか、まちづくりとか、共助の精神で参加をする、公共的な活動をしていただくことを、国としても応援していくというふうな考え方が非常に大きく打ち出されてございまして、最後に示させていただいているのは、住民とかボランティアとかNPOなど民間の団体と、地方公共団体、国も含めて行政機関ですね、行政機関と良好なネットワークづくり、お互いに助け合える仕組みを、関係を築いていこうということで、方向性としては示させていただいております。

内閣府のほうも来年度の予算要求で、NPO法人の皆様方や、地方公共団体において見守りの活動をしている事例を集めたり、今申し上げた、元気な高齢の方が、支えのいる高齢の方を支援しているような取組、それを後押しするような活動をされているNPOや公共団体などの取組みの例を調査したいと思っております。これ予算要求をしております。予算が通るかどうかはちょっとまだわからないのですが、予算が通れば、ぜひ調査をして、事例集みたいなものをつくって、こういう取組だと進むよというようなものを、自治体の皆様方とか、団体の皆様方にお配りしたいと思っております。私からの説明は以上でございます。

**樋口：**はい、ありがとうございました。これで国の直近の政策、特に人と人とのきずなづくりというあたり、そしてまた高齢化の波が日本はもう世界のトップを行くんで、私たちが何か新しい発明をしていかなければならないところに今いる、ということがよくわかりいただけたのではないかと思います。それではお待たせいたしました。仙台市の市長さんから今、この問題に関する仙台市の取り組みについてご報告いただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

**奥山：**ご紹介をいただきました仙台市の奥山でございます。今日は大勢の皆様にご参加をいただき、本当に嬉しゅうございます。

私からは、主に、とても元気なシニア皆さんが、この仙台のまちの元気を支えているということで、「元気元気」の事例をいくつか発表させていただきたいと思っております。

そして今日は樋口さんに仙台においでいただいております。私が35年前に仙台市役所に入りましてから、5、6年経ったころですね、仙台の女性団体のお一つが、樋口さんのお話を聞きたいと。どうやら東京のほうに「これからは女性の社会。高齢化の問題、特に介護の問題なんかは男性じゃ絶対わからないわよ、だって直面していないんだから。直面している女の人が声を出さなきゃだめよ」っていうと

とても元気のいい人がいて、バリバリやっているらしい。ぜひ仙台にも来てもらって、お話をお聞きして、バリバリの「バ」ぐらいは、頑張っていかなきゃ！と考えたグループがありまして、あのときはたしか戦災復興記念館だったかと思うんですけど、呼び出して、お話をいただいて、「なるほど、樋口さんっていう方はすごい方だなあ」と思いました。あれから既に30年になりましたか。



まさにあのときですね、私は忘れもしません。「老婆は1日にしてならず」ということをおっしゃられて、老婆というのはこれだけ年数をかけてなっているんだから、亀の甲以上の年の功があつて、しかも亀には口がないけど、我々には口という素晴らしい武器があるから、この武器を使えば、できないことは何もない。女が3人集まればかしましいぐらいの口の力を発揮するんだと、大変な元気をいただきました。おかげ様で私も口だけが達者になりまして、先生のご薫陶を受けて、市長選にまで出るようになってしまいましたので、ありがたいことでございます。

さて、本題に入らせていただきます。今日は全国からおいでの方もおありかと思っておりますので、まず杜の都仙台のPRのページでございます。牛タン、ずんだもち、そして冷やし中華、たくさんのおいしいものが仙台にございますので、ぜひこの味覚の秋を楽しんでいただければと思います。また、仙台ではイベントもいろいろ盛んなんですけれども、そうしたものを市民の方々の活動の力で支えていただいています。前頁に広瀬川の灯籠流しや光のページェントなどがあります。

また先ほども「杜の都のオトク体操」をやっていただきましたけども、地域でこういった体操を行うなど介護予防の取組みもあります。地域レベル、全市レベルの様々な活動が仙台の魅力をつくってきたと思っております。

先ほど、国全体のお話がございましたけれども、仙台も確実に高齢社会に向かって、高齢人口は増えています。仙台は幸いなことに、「学都＝学問のまち」とずっと呼びならわさせていただいておりますけれど、大学が多いものですから、まちには若い方が大変多い。東北の中では一番若い方が多いまちで、それでも年少人口に限ってみれば、仙台の小学生、中学生までの年少人口のピークは、もう昭和60年に過ぎておりまして、とっくに子どもたちの減少社会に入っています。これからは、総人口は減少、高齢者の人口は増加となり、これはやや後追いながら、全国の傾向を追いかけているということになります。

ではそうしたことが起こると、まちはどうなるか、ということも大きな課題です。この図は仙台のまちを、人口が増えているところは黄色と赤、減っているところは薄緑と緑で塗り分けたものです。丸のところは人口が増えている地域ですが、これは鉄道と地下鉄の沿線に集中しておりまして、今若い方がお住まいになるのは、地下鉄もしくは鉄道の沿線であるということがとてもはっきりしております。それ以外のところは緑や薄緑になっていますが、同じ仙台の100万の人口の中でも、若い方がとても多く、保育所が足りなくて待機児童がたくさんいるという地域と、一方で、郊外団地が古い団地になってきて高齢化率が高くなり、そしてお店も1軒2軒と閉店していったって、日常の買い物にも困るといような地域が、ある意味では背中合わせになっているのが、今の仙台でございます。

従って、私が市長として対応していくにあたって、片一方で小学校をつくり、保育所をつくり、片一方ではグループケアのホームが足りないというように、まち全体で人口が増えていくという時代とは違った状況が行政課題になってきています。人口の増減傾向が異なる、まちとしての「まだら化」の現象が起きていると思っておりますのでございます。

私はこれを「まちの骨粗鬆症化」と言っております、それだけまち自体が、ある意味脆

弱になってきていて、何かありますとポキッと骨折しかねない。まちを骨折させないで、片方で人口が増え、片一方で人口が減っていく、このバランスを取りながら、全体として元気な骨太の仙台をいかにつくっていくか、そこが私の市長としての腕のふるいどころでもあり、また何よりも市民の皆さんにいろいろな形でご活躍いただき、またご支援をいただくことによって、そういう元気なまちづくりができるものと思っております。

郊外団地で高齢化が進んでいると申し上げましたが、のちほどのパネルディスカッションでもご発表があるかと思えますけれども、例えば仙台市が開発をしました鶴ヶ谷団地という団地がございます。そこは全市の平均に比べて、やはり高齢の方の割合が非常に多い。鶴ヶ谷団地だけでなく、昭和40年代30年代につくられた団地について、やはり全市平均よりも高齢化率が進んでいる状況が目立ってきています。

さてここからいくつか、仙台のシニアの方々の活動を紹介させていただきたいと思えます。全市的には今申し上げたまちの骨粗鬆症化や団地の成熟に伴います商店街の閉鎖など、いろいろ難しい課題がございますが、一方で、お一人おひとりのシニアの皆様は、このまちで大変元気に暮らしていただいているところでございます。

遡りますと平成7年、今から15年ほど前になりますけれども、「シニアが元気なまち仙台」をまちぐるみでつくっていきこうという動きのもとになりました『夕陽は沈まない』という河北新報の連載キャンペーン連載がございました。皆様にもご記憶があるかと思えます。人の一生を太陽の動きに例えれば、高齢者は真紅に輝く夕陽の世代であって、決して暗い暗闇だけの中にいるわけではない。さらにいかに輝くかという、そういう発想の転換を訴えながら、シニア世代の意見や考えをまちづくりに生かしていこうと、そういう連載がございました。そうしたシニアの方々が、「シニアネットワーク仙台」というような市民団体をおつくりになりまして、例えば高齢者の方々のパソコン教室ですとか、あと先ほど内閣府からのご説明もございました井戸端会議のたまり場の居場所の創設ですとか、いろいろな活動がこの連載をさきがけにスタートしたということ、私も思い出すところでございます。

今、仙台でいろいろな市民活動があります中で、全市的に広い意味でシニアの方にご協力をいただいている取り組みの一つとして、「クリーン仙台推進員」というのがございまして、全市で3,500人ぐらいの方にご活動いただいています。仙台市では2年前からごみの有料化ということが取り組んでいます。移行の際、有料化にすると、不法投棄が心配だという声がたくさんございましたし、これについては「行政で取り締め！」という声も随分ありました。もちろん私どももパトロールは強化しますが、しかし一つ一つの地域については、やはりその地域の方々の目・手・足でお守りいただくしかないということで、クリーン仙台推進員の方々にそのご協力をお願いしましたところ、各地で素晴らしい活動を展開していただきました。これは全国に誇るべきモデル事業とっていいのではないかと思います。

なぜこれが素晴らしいか。ごみを不法に捨てる「悪い人」を探す、いわゆる犯人探しをやっているわけではないということです。悪い人捕まえて、「あなた！何でこんな悪いことをやっているんだ！」と責めていたら、逆に地域が疑心暗鬼になって、地域の和は生まれません。そうではなくて、こういうあなたの行為がこんなに私たちに残念がらせていますよ、もうち

よっとあなたも私たちと同じように、この地域を愛する気持ちに立ってくださいねという想いで、不法投棄されているごみの写真をデジカメで撮って、汚れている様子を回覧板に載せて皆さんの家に1軒1軒お回ししたり、あるいは影ながら集積所をきれいにして、きれいになった後ときれいになる前の様子を掲示板に貼ったりする。つまり、よりよい方向に向かってみんなで努力していこう、そしてそれがうまくいって成功したら、それを事例として共有して全市に広めようという取り組みなのです。

先ほども内閣府から、これから元気なシニアの事例を集めて、その共有化の作業に入るといってお話がありました。やはりこれからは、誰が悪い、これが悪いということ言うのではなく、まずできることをやってみよう、やって良かったらみんなで誉め合って、喜び合って、それをもっともっと広げよう、そういう取り組みが大切であり、必要だと思います。クリーン仙台推進員の皆さんは、ごみの活動を通してそれを実践してくださっているということで、私は全国どこに行っても、この活動は仙台市が誇る活動ですとお話をさせていただいております。

また「杜の都仙台」ですので、緑が本当に自慢です。「市長さん、仙台はきれいなまちですね」「東京から来ましたが、本当にこういうところに転勤できて嬉しいです」などと何人もの方から言っていただきます。その背景には先ほどのごみをきれいにするという取り組みのほか、きれいな緑をきちんと手入れをして、地域の方々に公園を楽しんでいただいたり、また仙台にはたくさんまだ雑木林のようなものも残っておりますので、そこの下草刈りをして、皆さんがその雑木林の中で、秋には散策するとか、雑木林の中でのアートフェスティバルというようなも行われたりしております、いかにも杜の都らしい活動だなあという、こんなこともしていただいております。

そしてまたこれもどこの地域にもあるかもしれませんが、「せんだい豊齡学園」といまして、多くの方々が学習をしたり、交流をしたり、そして素晴らしいのはやはり学習した成果を地域でいろいろな形で還元していただいております、地域の歴史の掘り起こしをしたり、また地域のイベントにお出ましをいただいたり、いろんなことをしていただいているということがございます。またこちらの写真のほうは「シニアいきいきまつり」ということで、スポーツを通じた介護予防、元気な方の健康保持・増進の活動の様子です。

先ほどの内閣府のお話にもございましたとおり、人と人が支え合うことが大事であるということについては、皆さん何もご異論はないわけですが、急に、「さあ、これからは支え合いの時代です、支え合ってください」と言われても、すぐにはできないわけです。普段からあいさつをする、あいさつをしていたのが立ち話をする、それが何かの会合で一緒になるというように、やはり人間の関係の深まりには必ずとステップがあるわけです。私も昔、男女共同参画などの仕事をしておりますと、「女の人っていうのは本当に茶飲み話が好きで、お茶ばかり飲んでるんだもんねえ」って時々言われました。

今、私は自信を持って申し上げるんですが、茶飲みこそが支え合いの第一歩でして、お茶を飲まずに支え合うということはなかなか難しい。お酒を飲むノコミュニケーションも大事だと思いますけれども、茶飲みということを軽んじては、高齢化社会はやっていけないのでは

ないかと思っております、私は今まず茶飲みから始めるということをもっと自信をもってやっていいのではないかとお話をさせていただいております。

こうした元気なお年寄りのたくさんいる仙台でございますけれども、ご承知のとおり、再来年2012年には、ねんりんピック宮城仙台大会がいよいよやってまいります。これは高齢者の方の国体と言われるものでございまして、今年は石川県、去年は北海道でございました。2年後はここ仙台・宮城でございますので、皆様方にはいろいろな形でお世話になると思います。全国の皆さんの元気なご様子を拝見して、我々もさらに元気をいただくという大会でございますので、私としてもおおいに期待をしているところでございます。

また老人福祉センターというのがございますけれども、そこではこうした演芸の発表でありますとか、いろいろな形で、ボランティア活動としてやっていただいたり、というようなこともございます。

そして先ほどは「杜の都のオトク体操」という、元気を維持して、介護のお世話にならないための体操を皆さんにやっていただきましたけれども、今、仙台では介護予防の「SKY大作戦」という作戦を展開しているところでございます。仙台（SENDAI）の「S」、介護（KAIGO）の「K」、予防（YOBOU）の「Y」、というこの頭文字を3つ取って、「SKY大作戦」と言わせていただいております。いろいろな場面で健康に気をつけ、そしてまた専門の方のアドバイスを受けながら、皆さんで楽しく体を動かしたり、そして何よりもお話をし合ったり、頭も動かして、そして元気になろうという取り組みでございます。

また今年はシニアの劇団ということで、ここに「まんざら（満座楽）」と劇団名が書いてございますけれども、このシニア劇団が立ち上がり、皆さんが今練習をなさっているところです。来年の1月には公演が行なわれるということでございますので、どんな筋書きになりますものか、私も楽しみにして、拝見をさせていただきたいなと思っておりますのでございます。

スポーツ、それから音楽、こういった文化活動、様々な面で元気な方が輪をつくる、そしてその輪のどこかに新しい人が入って来ます。私はぜひ皆さんには“とりもち”になっていただきたいと思うんです。ご存じかと思えますけど、“とりもち”というのは巨大な接着剤のようなものでございまして、ピタッと誰かにくっついたり、服にくっついたりするとなかなか取れない。人間には“とりもち力”の強い人と、弱い人がいるわけで、例えば樋口さんなんかはもう非常にとりもち力の強い方で、樋口さんに一言ピタッと目を見られて、「あなた、よろしく願いますね」って言われれば、「わかりました」って頷いてしまうという、本当に人間とりもち力の達人のような樋口先生でいらっしゃる。例えば目で見ただけというのは難しくても、ぼんぼんと肩を叩いて、「じゃちょっと今度ご一緒にあの会合行ってみませんか？」っていうと、それまで家に引きこもっていた方も、「何かあの人に言われたら、普段もお世話になっているから、ちょっと行ってみなきゃならないかなあ」と行ってみる。そうするとそこから何かが開けてきます。

やはり、最初の一步というものを引っ張り出す、押し上げる、そうしたことが、地域の中で、それと知られずに行われているということが、とても強い力なのだろうなあと思ってお

ります。私はぜひ仙台でも、また日本全国でも、この「人とくっつく」力、砂のようにさらさらっと分かれていく関係ではなくて、1回ギュッと握ったらご飯粒のようにぎっちり固まりつく、そういう力をまちとして持つ、そんなまちに仙台をしていきたいなと思っているわけでございます。

次に、シニア活動支援センターについて紹介をさせていただきます。これからのセカンドライフをどういうふうにお過ごしになりたいですかというようなことも含めて、シニア世代の方々により活動的に過ごしていくために、平成19年7月に、シニア活動支援センターが、市民活動サポートセンターの中にオープンしました。今日のパネルディスカッションの中でものちほど、このシニア活動支援センターを利用されたご体験を持つ方もおいでになられると思います。こういったシニア世代を対象にコンサルティングして、何かと何かをくっつける、そうしたシニア世代の仲人さん役みたいなことも、センターではいろいろやっています。

このように仙台では元気なシニア世代の方に活躍いただいて、まちもその元気に支えられています。こうした中、今仙台では新しい総合計画の策定を進めてございます。「ひとが輝く杜の都」というのがその大きなメインテーマでございまして、「学びの都」、支え合う「健やかな共生の都」、自然と緑が美しい「潤いの都」、そして経済の元気な「活力の都」という4つの都市像を掲げてプランづくりをしているところでございます。

お一人おひとりの皆さんがいきいきと暮らしていただき、そしてそのいきいきとした皆さんが集まって豊かな地域、そして元気のある仙台につながっていくというふうに思います。シニアの皆さんは仙台の元気の素、仙台の大切な宝として、ぜひこれからも元気にお過ごしただければと思います。ご静聴、本当にありがとうございました（拍手）。



樋口：ありがとうございました。奥山市長のご講演のタイトルは「シニアの元気はまちの財

産」というお話でございまして、まさにシニアを財産としながら、仙台市政を進めていくというお話でございました。ここから先は政府担当高官と大仙台市長との間で少しやり取りをしていただきたいですけれど、まず小林参事官、今あえていえば仙台市という巨大な好事例のご報告だったと思うんですけれど。国の担当官として、今の仙台市のご報告を聞いてのご感想をお願いいたします。

**小林：**感想は一言で言って、やっぱり素晴らしいなと思ひまして、私ども最後に申し上げたように、来年度、調査をやっというと思っているんですね。ぜひ仙台市さんがやっというらしいような取組も上げていただいて、仙台市さんだけで持っというらしいのはもったいない話でございまして、それを地域によってできることとできないことと違っという思うんですけれど。こういうふうな状況にあるような地域であれば、こういうやり方があるよっということをぜひ伝えていきたいと思ひますので、本当に大変参考になるようなお話でございました。

あと待機児童がある、要はお子さんがたくさんいらっという場所もあれば、ご高齢の方が増えていて、人口が減っという地域と増えていて地域があるというふうなお話がございまして、日本全体の縮図みたいな話がございまして、その観点からもこういう取組をやる、この人口構成のまだら状況に対応できたというふうなことをご示唆いただけるようなのがあれば、国にまたお寄せいただければというふうに考えております。

**樋口：**ありがとうございます。こういうものをまとめて、国としてやっという国全体の鳥瞰図というものをぜひ書いていただきたいと思ひしておりますけれど、奥山市長さん、どうでしょう。いやあ、仙台市、今伺っという、本当に地下鉄の駅のあるところには若い人が集まっという、背中合わせで何だかシャッター一通りができていっという、これ大都市、恐らく東京にも共通する「まだら現象」「骨粗鬆症」下手すると骨折する、何だか高齢女性にとっというは聞き捨てるならぬような、大変な問題でございまして、本当に転倒骨折しないよっという、そうした市政を支えていくよっというのはとっという大変な、市長さんとしても、舵取りの難しいところだと思ひますけれど。

仙台市ほどの大きな政令市になれば、独自の取組みよっというか、自己完結にやれることもあるよっという思ひますけれど、とは言いながらやっという国として、こういうところに着目してほしいよっというか、こういう政策には力を注いでほしい、あえていえば予算を出してほしいよっという、みんなよっということなよっというんですけれど、国へのご要望をこの機会にございまして、どうぞご遠慮なくおっといういただきたい。

**奥山：**はい、ありがとうございます。

一つは、先ほど一人暮らしの高齢者の方が増えていてよっというお話がございまして、けれども、「高齢者の方と住まい」とよっという問題ですね。これは難しいなあと思ひているところだと思ひます。



自分の家で最期まで過ごしたいということを希望されている方は多いですが、例えば借家の場合、ある程度身体機能が落ちてくると、家主さんから「ちょっと心配だから、子どもさんのところに移れませんか」というお話があったりします。もちろん特別養護老人ホームですとか、グループホームですとか、いろいろな形のいわゆる施設もつくられていますし、仙台も整備しています。しかし、お一人であって、高齢であって、施設で完全なケアを受けるほどにはダメージは強くなって、若干の地域の支えなどがあれば、生活はできる状況のときに、アパートなり、借家なりといったものの中では、なかなか住まいを見つけにくいという状況が仙台ではあるわけです。

そういう中で、高齢者の方の住宅環境に対して、国として、今までのような「施設か、自宅か」というその中間領域に関する、何かしらの政策的な誘導みたいなものがあれば、多少ハンディがあっても地域で暮らしていけるという方がもっとこれから増えるのかなと、そんなことを思いました。国全体としてはどのようなことをお考えか教えていただければと思います。

**樋口：**本当に今、小林参事官のほうから今日ご提供いただいた高齢者白書の中で、人の絆、絆の再構築というようなことが最大のテーマであったように思い、それはまさに何ていうか、予感が的中したというか、先見の明があるというか、これ出してから今年の夏、まさに超高齢者の所在不明問題、地域と家族との絆の希薄化ということが大きな問題となって、これは非常にいいテーマだったと思います。

と同時に今、奥山市長からご指摘のように、実は今、高齢者政策の中で1つ重要な課題が、高齢者の住まい安定法も、新しい高齢者住まい法も改正されましたけれど、今、実は高齢者の終の住み家というと、特養は足りない、有料老人ホーム、それから高専賃、高円賃、高何とか賃、何とかってずっと高齢者の住まいの世界は今やある種、高齢者にとっては目まぐるしくて、戦国時代で、一体どこで終の住み家、安心の住み家が見つけられるのだろうか。

厚労省と国交省とがやっとな手を結んでここ数年、新しい住まいへ乗り出してきたことは結構ですけど、何か高齢者の願いと必ずしもうまくドッキングできていないんじゃないかというような気も、私はいたしております。

もしかしたら高齢者が、1人暮らしの人が望んでいるのは、住まいというより、実は介護というサービスなので、その分が少しずれているんじゃないのかなと思ったりもいたしますけれど、また小林参事官、全部責任持って答えろ、なんて言っても、これは国交省もからんでまいりますから、お差し支えない範囲で、住まいの問題、今ちょうど奥山市長からもご提言、ご質問がございましたので、触れていただければと思います。

**小林：**樋口先生もおっしゃっていたように、厚生労働省と国土交通省のほうで手を結んで、そういう介護サービスのものも取り入れた高齢者向けの住まいというのを広めていこうということで、これはまだちょっと、多分普及といえますか、具体的にどうやるかも含めてまだ検討途上だと思うんですね。これからどんどん広めていこうという話なので、そこは本

当にこれからやっていくべき課題だということでございます。

あとは高専賃とていうものもかなり力を入れております。これから伸びていく分野だと思うんですけども。まだ課題がいろいろあると思います。

**奥山：**これからの工夫次第ということでしょうか。

**小林：**これからの工夫次第かなということで、あとよく聞きますのが、やっぱり賃貸物件を借りるときに、高齢者の方はなかなか保証人が見つからないので借りられないというようなこともございます。これは多分国土交通省さんでやっていらっしゃる施策だと思うんですけど、保証人がなくても、ご高齢の方も借りやすいような住宅を登録したりしているような制度もあります。まだまだPRが不足しているのかなと思っておりますので、今ある制度をいかに使っていただくかということと、介護というか、福祉サービスを提供できるような高齢者の方向けの住宅を普及していくことと、それから量的なものが不十分なので、それをもう少し増やしていくということ、その辺をセットで考えていかなきゃいけないと今日お話を聞いて思いました。

**奥山：**ありがとうございます。

**樋口：**あと5分しかないのですけれど、せっかく内閣府から参事官、そして仙台市長がいらっしゃっていますので、今日ここにお集まりの皆様からお1人ずつ、1人ずつですけど、ぜひこの場でご要望しておきたいことがあるという方がいらっしゃったら、手を挙げてください。

また私ども高連協として申しますと、これは堀田力代表がやっていらっしゃることでございますけれど、保証人とまではいきませんが、保証人もやるのかもしれませんが、市民後見人、成年後見人という運動をどんどん進めてまいりまして、高齢者自身がまた高齢者を支えるような専門性を持って活動するというようなことも、私ども高連協でも進めてまいりますので、どうぞ皆様と一緒にご活用いただきたいと思います。どなたか小林洋子参事官に要望ないし質問したい方、どうぞ手を挙げてください。

**渡辺：**本日、表章いただいた笑学校校長渡辺と申します。

**渡辺：**小林参事官にお願いいたします。今日はいろんなデータのご説明をいただきましたが、できればデータ説明はほどほどにさせていただき、あまり数多くやらないほうがいいと思います。その代わりに高齢者がわかりやすいキーワードで説明してほしいんですよ。例えば樋口さんのように、「第二の義務教育」とか、「人生100年の船に乗ったんですよ。我々が初代ですよ」とか、大変わかりやすいわけですよ。ですから国はあんまり言葉、きれいな言葉並べないで、市民がわかるような、国民がわかるようなキーワードで説明してくれるようお願い

いします。

**樋口：**ありがとうございました。どうぞこれはご要望として持ち帰りいただきたいと思えます。では仙台市長に申し述べたいことはありませんか。

**安海：**せっかくの機会ですので、ぜひ市長さんをお願いしたいことは、私、「男の台所」というのをやっているんですけど、男性の目線でいろんなことを考えているんですけど。特に最近、子育て支援というのがやっぱり非常に大事になってきていると思うんですけど。特に男性の一人親ですね。父子家庭の問題っていうのが、ちょっと抜けているような気がするんですけど。この辺を1つてこ入れしていただいて、もう一段変わった目線で、子育てに膨らましていただければありがたいなと思えます。

**樋口：**ありがとうございました。シングルマザーのことは、いろいろいわれていますが、シングルファーザーのほうがより深刻な問題も抱えていると思えます。私はつくづく思いますが、高齢者の政策とか高齢者の活動というのは、今高齢者に対する福祉や様々なことを要求するだけでなく、それはどんどん要求していいんです。私たち初代ですから。だけど、同時にやっぱり日本は今、人生100年ということはどういうことかということ、0歳代もいれば、10歳代、20、30、40、飛ばして90、今10年ごとの年代差で増加率が一番目覚ましいのは90代です。90代、そして100。つまり私たちは世界の中でも、0歳から人生100年まで、非常に多様性の豊かな国にいるということでございます。

0歳代の人と、90歳代の人が同じ空気を呼吸して、一緒に暮らせている社会というのは、世界の中でもまだ珍しい。多様性の時代でありますから、私たちは横の多様性は人間から他の生物まで、そして女と男という違いを含め、国際性へと広がりますし、縦の多様性、この年代別の違いを生かしながら、多様性、違いを生かして力にしていくというところに、一番今近いところにいるのが、我ら日本人でございますから、ぜひ私たち高齢者も次の世代、子育て支援をしていくことをやはり視野に入れながら、高齢者の活動をするべきではあるまいかと。

私は、高連協の代表であると同時に、堀田力代表も私も日本子育て応援団の4人いる団長の1人でございます。あと2人は若い世代で勝間和代さんという人と、安藤哲也さんという人、この4人が子育て応援団にも関わっています。そしてそのことを通してこそ、人生100年、終わりよければすべてよしといわれる高齢者の幸せを展開できるんじゃないかと思っております。私がしゃべらないと言って結構しゃべっちゃいましたが。

このようなことも含めまして、最後のご質問も含めて、これからの地域社会をどのように建設していくか。特に子育て、小林参事官は子育てのことも担当の中に入っていると思いますので、日本のこの多様な世代、高齢者と子育てということも入れながら、一言ずつご感想と豊富をいただいて、今日は終わりたいと思えます。それではまず仙台市長からお願いいたします。

**奥山：**はい、ありがとうございます。シングルファーザーについてですが、この活動も仙台にいらっしゃる方が全国に対してする働きかけのきっかけになられた活動でございますよね。シングルファーザーの皆さんの大変なお力で、児童手当については、シングルファーザーもシングルマザーと同じようにもらえるというように制度が変わりました。ただし、仕事を持つときの訓練をシングルマザーは受けられるけれども、シングルファーザーは受けられないとか、若干まだアンバランスなところが残っていますし、それらについては私ども自治体が国とも連携しながら、頑張っていければと思います。

また、お話をいただきましたように、国の法律では65歳以上を高齢者といって、高齢化率も例えば仙台であれば、18.7%と出てくるわけなんですけど、実体として私が感じている高齢化率というものは、全然違った数字でございます。私の頭の中では独断で、「75歳以上でなければ仙台市では高齢者とはいわないのではないか」と思っておりまして、「仙台の高齢化率はまだ15%以下であるから、若いまちとして頑張りましょう」ということを普段申し上げているところでございます。統計にとらわれることなく、意欲があつて、元気であれば、今が青春という時代です。ご一緒にまちづくりに取り組んでいければと思っております。よろしくお願ひいたします（拍手）。

**樋口：**では小林参事官、お願いします。

**小林：**少子化の問題と高齢化の問題というのはセットの話だとは思ふんです。今、仙台市長からもお話があつたように、年齢は関係なく、また世代間で対立することはなく、元気で能力のある方はご活躍いただいて、しかし困ったときはちゃんと助けられるような、国や地方自治体の制度、それから社会全体で支える仕組みをつくっていきけるように頑張っていきたいと思ひます。

**樋口：**国の政策も仙台市の政策も、そして皆様方がその主役としてますます進むことを期待いたしまして、シンポジウム第1部を終わりたいと思ひます。皆様、ご協力ありがとうございます（拍手）。小林参事官、仙台市長、本当にどうもありがとうございました。

